

サデイは大体いつも吐き気に悩まされていた。原因は内臓疾患。いくつか併発しているが、特に胃がひどい。生まれつき胃液の分泌が異常なため、起き抜けも、昼間も、就寝前も、悪い時には食事をしながら吐きそうになる。吐き気を抑えようとすれば目眩と耳鳴りと悪寒に五感を支配され、そこまで我慢しても結局は耐えきれずに吐いてしまう。

彼は衛士団の中でも飛び抜けた腕を誇っていた。その細い身体からは想像できない力で身の丈ほどもある槍斧を軽々と振り回し、刃一閃すれば化生の三匹や五匹まとめて輪切りにしてのける。戦闘の力量だけならば衛士団長に選ばれても何らおかしくないと言われるほどだった。衛士団内での定期戦でもほぼ負けることはなく、好調時の彼には挑む者すらいなくなる。

しかし、内臓疾患による吐き気というただ一点によって彼は何年経っても下っ端のままであり、またからかいの対象を超える存在になることができなかった。

新入りが最初从上から教えられるのは健康に気を遣うこと、そして吐き気を止められない男は反面教師にするようにとの差別的指令である。新入りは大抵それを忠実に守って彼を影から笑い、わざとへりくだった挨拶をし、食事時になるとわざとらしく吐く真似をする。

「サデイさん、今日の気分はどうですか」

もちろんサデイも吐き気を止める努力をしていなかったわけではない。彼は休日ごとに町の調剤薬局を訪ねては様々な薬を試していた。一軒目で駄目なら隣ブロックの店へ、それでも治らなければ路地裏の怪しげな薬売りの元へ。ふらつく身体に鞭を入れて、対抗手段を模索し続けてきた。その結果、町中で薬を扱う者はおろか旅商人ですら彼の存在を知るようになった。彼らはみなサデイの真摯な姿勢と青ざめた顔に打たれて出来る限りの処方を試みた。サデイ自身も薬学を学び、自らを実験台に薬草を調合するなど涙ぐましいほどの力を内臓へと注いだ。

それだけの努力を持ってしても彼の吐き気は収まる所を知らなかった。むしろ病状そのものは年々歳々悪化して行くようだった。

薬が何一つ功を奏しなかったわけでもない。ある調合の煎じ薬は症状の劇的な改善に成功した。それを手にした次の定期戦、サデイは自慢の槍斧で五人の猛者を瞬く間に打ち倒す絶好調ぶりを見せた。だがそれは文字通り劇薬であり、一時的に吐き気を治すものの副作用として別の内臓に甚大な打撃を与えるものだった。彼は煎じ薬を飲んで半時間すると超人的な力を発揮する。そして、それから半日が過ぎると元より悪い身体を手に入れることになるのだった。

団員達はその姿を見て以前より一層大きな嘲笑を彼に浴びせるようになった。それは服用後の姿から恐怖を感じた反動と言えるかもしれない。サデイは本調子になればいつでも自分を殺

することができず。吐き気がなくなれば自分より上に立たれてしまう。そのような被害妄想的思考がごとごとく弾効の圧力へと形を変えたということは、有り得ない話ではない。

「そこまで過酷な扱いを受けてもサデイは決して衛士団を抜けようとしなかった。童顔で人当たりが良く、強さの上に病の影も背負っている男である。世話を買って出る女性はそれこそ山のようにいた。衛士団の中でサデイの女性人気は群を抜いており、彼の郵便受けにはひっきりなしにいたわりや淡い想いを書き連ねた手紙が届けられた。

にも関わらず彼は女性の庇護の下に生きることを良しとしなかった。どれだけ甘い言葉をかかけられようと黙して衛士団の仕事に携わったのである。

激しい運動をすれば必ずその日の食事は吐いてしまうし、その度に近くにいた衛士から罵声が飛んでくる。おそらくはそれがストレスになって病を悪化させている部分もあっただろう。何故サデイが決して衛士団を離れようとしなかったのか、その理由は未だ持って誰も知らない。

衛士団の人間全てが彼を見下していた訳ではない。中にはその力や人格に惹かれて対等ないし下から付き合う者もいた。だが、そうした人間は必ず大半の衛士からサデイと同一線上の存在として扱われるようになった。サデイと脆弱な仲間達。

「彼らはそのうち耐えきれなくなって尋ねるのだった。」

「サデイさん、何でこんな所にいるんですか」

「町が好きだから」

「頭もいいんだし、もっと身体に合った仕事を探してもいいじゃないですか」

「僕にはこれを振り回すくらいの才能しかないよ」

「だったらそれで上の連中を黙らせてやりましょうよ」

「そんなことしたって何も変わらないと思うんだ」

「一事が万事この調子だったので、時間が経つに連れ彼らは一人また一人とサデイの元を去って行った。」

「そんなわけで、彼は大体いつも一人で吐き気と戦っていた。」

## 二

それはそれとして、都市対抗戦の日が近づいていた。

各都市の衛士団は団内で定期戦を行い切磋琢磨するのももちろんのこと、毎年収穫期になると近隣都市の衛士団と親好、祭祀、力の誇示の意味を込めて交流戦を行う。これは定期戦の成績により選ばれた五名が特設闘技場にて順々に手合わせをするもので、収穫祭の目玉の一つとして市民や旅商人の注目の的となっていた。

「代表者のうち四名はその年の成績により決定される。以前は一部が人脈ないし権力によって

選ばれていたのだが、あからさまに腕の落ちる者が出てくると大きな不評を買うため、近年そのような不正は段々と減って来ている。大将は基本的に団長が努め、対抗戦のトリにふさわしい熱戦を繰り広げる。そして、その盛り上がりや戦績によって収穫祭の価値も決まる。引いてはホストをつとめた都市の評価が上下することとなる。

サデイの町は規模の割に豪華な舞台を用意する予算を割り当てられており、また客側から見ても当たりの年が多く、収穫祭の盛況ぶりに立派な華を添えていた。勝負は大将戦までもつれ込むのが常で、その大一番も例外なく一進一退の攻防を見せるという最高の展開である。半ば形骸化し単なる見せ物に成り下がった都市が増えている昨今これは珍しい部類に入る。市民の話題は収穫期が近づくと対抗戦の予想で持ち切りになったし、戦いを根本的に嫌う人々以外は概ね衛士団の催し物を誇りに思っていた。

ところが今年の問題があった。団長のハイトが足を骨折したのである。

話は対抗戦から半月前の訓練に遡る。

ハイトは初心者相手の実戦訓練を行っていた。他都市の衛士団ではある程度の基礎ができるまで実戦を行わせないので常識だったが、この町では少々勝手が違う。伝統的に、新入りでも必ず実戦訓練へと駆り出す習慣を持っていたのである。練習は実戦に直結しない。実戦からのフィードバックを持って初めて練習に実が入るとというのが代々の習わしだった。

ハイトはいつも通り新入りのおぼつかない太刀筋を一つ一つ受け流しなら丁寧に指摘し、大きな隙が見られると刃を弾いて喉元に切っ先を突きつける。その回数は訓練時間が経つごとに増えて行く。初心者は大抵振りが大きく無駄な動作にまみれているうえ基礎体力が足りていないので、ハイトが一太刀返すごとに三倍の疲労を覚え、あつという間に汗みどろになった。それでも訓練の辞退は認められない。ハイトが良しの合図を出すまで手合わせは続く。それは衛士団における通過儀礼の一つと言えた。

事故は、新入りの疲労度が最高値に達した時に起きた。

ハイトは残り五手で訓練を終え、最後にもう一度寸止めをして締めようと考えていた。一方新入りの頭からはそんなことを考える余裕も消え去っており、視界は臉に落ちる汗でおぼろげになり、残されているのは次の一太刀を振るう強迫観念だけだった。彼は腰元に構えた剣にありったけの力を込めて水平に斬りつけようとした。しかし腕の力はイメージに落ちてくることなく、切っ先は垂れ下がりハイトの足元目がけて歪んだ軌道を描いた。剣を逆手に持ち替え落ち着き払って弾こうとするハイト。ところが、ステップを踏んだ瞬間に足元の石畳が崩れ落ちたのである。

バランスを崩した彼は誤って重心を利き足に移す。重心移動により傾いた身体は武器をイメージより高い位置に引き上げ、新入りの剣はその下を通過し無防備になった脛へと惰性的に吸い込まれて行った。

訓練用の刃引きされた剣だったから骨折で済んだ。そう考えれば運が良いと言えないことも

ない。だがタイミングとしては最悪だった。全治までには軽く見積もって一ヶ月を要するた  
め、当然対抗戦には支障が出る。もちろん無理を押し出場ですることも可能だろうが、そう  
なるとまた別の問題が発生するのである。

特例として五人目の出場者を団員から選ぶことが許されている。ハイトはいくつかの名前を  
頭に浮かべては消し、その度に自らの出場を考え、それはいかんと戒め、最後に一つの決断を  
下した。

サデイが執務室に呼び出されたのは、対抗戦の実に一日前のことだった。时期的に用件は大  
体特定されている。他の団員は彼に嫉妬ないし訝りの視線を送り、ごく一部の者は決まっても  
いない事柄に大いなる賛辞を贈った。

彼はいつも通りの青白い顔で、一寸ためらってから執務室の扉をノックした。

「やあ、団長」

「ハイトで構わん」

「出られそうなの？」

「だったら呼ばんよ」

「そうだろうね」

彼らは同期の入団だった。ハイトは、サデイとは対照的に史上最年少で団長に就任するなど  
数多くの実績を打ち立てていた。また精悍な顔立ちと責任感の強さからサデイに次いで女性人  
気が高く、更には彼と違って団内での信頼も厚かった。

「僕が出たら文句がひどいよ」

「結果を出せばそれも消える。お前はそろそろ評価されるべきだ」

「あんまり興味ないけど」

「こちらは十分ある」

「勝ってもいいの？」

「構わん。今年はこちらの勝ち年だ」

つまりはこういう事だった。ただ普通に対抗戦を開催するとしたら、評価の高い年とそうで  
ない年の波が必ず現れる。しかし、見せ方を偏重すれば他都市と同じく競技性を失い人々は離  
れて行く。それを防ぐため、毎年団長同士が話し合っって面子を決めることで最終戦までテン  
ションが持つよう戦いをコントロールし、最終戦についてはその年の状況を鑑みてどちらが勝  
つか決めておくのである。

ここ三年で戦績は一勝二敗。都市間のパワーバランスも大きく傾いてはいない。つまり今年  
はハイトが勝つ算段なのだった。

問題がややこしいのは、ハイトの腕が相手団長よりも遥かに勝っている点だった。言っ  
てしまえば片足を負傷した状態でも勝利することができるのだ。とは言え、それを実行すれば過去

の二敗はどういうことだったのかと取沙汰される羽目になりかねず、同時に今後の方針を立てづらくなる。

一方で、勝てるのだから自分が出て良いのではないかという若さ溢れる願望が彼の胸にはあった。その一点において判断の保留がなされていたのである。

相手方からはハイトの敗北案も出ていた。それはそれで一つの選択と見なしていたが、彼の性分は安易な採択を許さなかった。

サデイにその任を委ねようとしたのは、すなわち勝ちに出ることを決めたわけである。

「軽く勝っちゃわない方がいいんだよね」

「致し方ないことだ。だが最低限の仕事はして欲しい」

この一言で、サデイは団長代理を承諾した。

本調子ならばハイトと同等かそれ以上の腕前を持つサデイにとって、薬さえ飲めば勝つことはそう難しくない命題だった。しかし彼は常日頃の不調と、相対するような絶好調という二態の中間を知らなかったため、結果として手加減をすることが極端に苦手だった。槍斧を構えれば可能な限り素早く片付ける。さもなければ倒れるのみ。獣性にも似たその感覚は、衛士団における彼の扱いを一層困難なものにしていたと言える。

本気を出しても構わない。これはサデイにとつて重要なファクターだった。相手もハイトより劣るとは言え一都市の衛士団長を勤める男である。薬を飲まない状態では勝てる保証はない。いきおい薬を飲まなければならぬわけだが、そうすると接戦を繰り広げることに無理が生じる。このジレンマが多少なりとも解消されることは大きな意味を持つ。

サデイは久々の大舞台で思うさま戦える期待に打ち震えた。化生相手には毎年のように行っていることだが、人間相手、しかも多くの観客に見守られていることとなれば状況は全く別である。どのように倒そうか。どうやって魅せようか。そんな喜びの思考に彩られ、彼は体調不良にも関わらず久々の深い睡眠をむさぼった。

翌日、起き抜けに部屋の前を探ってみると有用な薬が根こそぎ消えていた。

彼は腰に手を当て髪をかき上げ深く青いため息を一つだけついた。

### 三

歓声が闘技場内にこだましている。観衆が試合の機微に呼応して上げる嬌声と悲鳴は、渾然一体となって大掛かりな波を作り上げる。さながら風いだ砂浜のように。あるいは風足の強い内海のように。彼らが空気を震わすたびに五百人規模の闘技場が揺れ、衛士達の鍛えられた筋肉に活が入り、そして控え通路の壁に寄りかかって座るサデイの胃が締め上げられた。

対抗戦は第四試合に入っていた。ここまでの戦績はサデイ側の二勝一敗。先鋒に抜擢された新入りが予想外にあっさりと負けたものの、その後は熟練の衛士が体勢を立て直し、例年通り

の起伏ある舞台を整えていた。四戦目は開始直後から相手の攻勢が激しく一方的な展開になるかと思われたが、そこは打ち合わせと訓練の成果というところか。一瞬の隙から反撃に転じて現在は互角の勝負を見せている。サデイが横目で見た限りに散見される作為的な隙は、しかし観衆の目を騙すには十分な精度を持っていた。

サデイは脇に立てかけていた槍斧を手元へ持つてきて、斧刃の部分に軽く触れた。磨き抜かれた刃の腹は松明の光を受けて黄白色の円を浮かべている。あと十分もすれば相手の団長と切り結ぶであろう薄い鉄板を、サデイは愛おしげとすら言える手つきで撫でてやる。信用に足る人間の少ない中で生きてきたからかもしれない。彼はいつからか自分の相棒に強い思い入れを注ぐようになっていた。たとえそれが物であるとしても。

槍斧は何も言わず彼の手の内で輝いている。何百回何千回と握り込まれた柄は一部が丁寧に塗られたのではないかと思わせるほど色あせている。サデイの吐息が斧刃にかかるたび、薄ぼんやりした白い円が広がっては消える。

刃から視線を離して闘技場を横目で見やると、試合はやや優勢といったところまで盛り返していた。四番手の衛士アンガスは、そのトレードマークとも言える大剣を思うさま振るって相手衛士の足を完全に止めている。しかし相手も身動きがとれないところまで追いつめられている感はない。体勢的には引き気味であるが一撃一撃を着実にさばいている。押し込まれつつも反撃の機会をうかがっているという様子である。

おそらく最後に逆転されて大将戦にもつれ込むだろう。サデイは目を細めて考えた。わかりやす過ぎる筋書きと言えばそうだが大勢の観衆に訴えるには最高の形である。アンガスが更に攻撃の手を強め、止めとばかりに放った斬撃をかいくぐって紙一重の勝利。実戦ではあり得ない状況も、衛士にとつての模擬戦である対抗戦においては許される。その後サデイが求められるのもまた、接戦の末の勝利である。

現状からは接戦どころか勝敗の行方すら想像がつかない。

いつそのことこのまま勝ちちゃつてくれないかな、アンガスさん。

一瞬間をよぎった考えをサデイはすぐさま否定した。たとえここでアンガスが勝ったとして、サデイが簡単に負けて良いという理屈には繋がらない。勝敗が決した上での大将戦となれば、好試合への圧力はむしろ強まると言つて良いだろう。つまり自分はアンガスの勝利を望むべきなのだ。そしてその上に希望を乗せられるのであれば、決着までなるべく長い時間をかけて。そうすれば身体にも少しは余裕が生まれるし、長期戦の連続はよろしくないという理由からある程度楽な試合運びもできるというものだから。

どちらにしても、確かなのは気持ち良く動けないということだ。

サデイは冷たい壁面に後頭部をもたせかけ、焦点を現実から外した。

戦闘を終えた三人は既に闘技場から立ち去った。今頃は詰め所か酒場に集つて互いの労をねぎらい合っているに違いない。他の団員は祭りの警備に駆り出されているから、一足先の宴会

というわけである。

彼ら是对抗戦の頭から通路に座り込んでいるサデイに一声かけはするものの、それ以上積極的に関わろうとはしなかった。一見して薬を切らしていると分かったからだ。薬の切れたサデイは刃引きされた短剣に等しい。彼ら是对抗戦の惨憺たる結末を予測し、それを連想させる彼から一刻も早く離れたがっていた。負けて戻ってきた新入りに至っては、彼の存在に無視を決め込みすらした。そして誰一人ハイトに状況を伝えようとはしなかった。

耳に飛び込んでくる歓声と剣戟の音を整理してゆけば、残された時間が大体わかる。アンガスの大剣が盾を打った。力強い一撃だが手から弾くまでは至らず、相手はすぐさまバランスを整えて返しの一突きを放つ。アンガスの剣が地面を擦りながらそれを受け流す。火花が散って客から驚きの声を誘い出す。

戦いを整える形で反撃が来たのなら、それは長期化の合図だ。前三試合と合わせてみると、流れのままに試合が終わることは考えにくい。サデイは反撃が出来るだけ長く続くことを願った。返され、返し、最後に返される。おそらく五分かかるかからないかの時間稼ぎである。サデイは薬探しに一時間を費やした自分を呪った。朝起きて見つからなかった時点で見捨てられたと諦め、別の手段を考えるべきだった。前日に生まれた欲が発想の転換を阻害したのだ。

彼を良く思っていない集団、その最右翼であるアンガス一派が薬をどこかに持ち去った。普段のサデイならば、直感でそれを察知し薬剤師の元を訪ねるなり何なりしたに違いない。致命的な選択ミス。一時間あてもなく詰め所を探しまわった挙げ句、手に入れたのはいつも以上の吐き気と揺らめく視界のみ。焦っている場合ではなかったのだ。

「サデイさん」

闘技場からやって来る音の奔流を、氣遣わしげな問い掛けが打ち破った。まだどこか幼さを残す響きはサデイの耳の奥に入り込んで溶けてゆく。しかし、サデイはしばらく耳元近くから発されたその声をうまく認識できずにいた。視界は二重写しになったまま不規則な曲線を描いている。とにかく少しでもましに。自らの願いだけが彼の心中にこだましていた。

「サデイさん」

少女はサデイの前にしゃがんで直接目を覗き込んできた。はっきりしないがどこか見覚えのあるショートカットが彼の意識を現実へと引き寄せる。その目には彼の名を呼ぶ声と同じ温度の気がかりさが満ちていた。

「サデイさん」

「レーゼ」

三度目の呼びかけにやっと答えると、少女はほっとした様子で微笑み、肩にかけていた鞆を床へと下ろした。両手には口の長いポットが大事そうに抱えられている。サデイはそのポットにも見覚えがあった。例の劇薬を調合してくれる薬剤師、彼の店にいつも置かれていた薬湯の

ポットだった。

「闘技場に入る前、顔色悪そうだったから勝手にしてきました」

「そのポット、持ち出していいの？」

「お父さんは試合見に来てますし、すぐ持って帰るから平気です」

言いながら鞆から肉厚のマグカップを取り出しサデイの手に握らせる。マグカップは冷えていたが、レーゼの手は薬湯を運んで来たせいにか心地良い温みを帯びていた。

「すぐ効く薬湯作ってきました。飲んでください」

そして、手に持ったポットから慣れた手つきでマグカップへと薬湯を注いだ。浅葱色の液体はいかにも薬湯といった風情を醸し出す。晩秋の冷気に湯気の柱が立ち上る。薬湯がマグカップの七割に達すると、彼女は手を止め再び彼の眼を、今度は意思を含んだ目つきで見据えた。

サデイはマグカップを伝う熱気を両手で受け止める。それから半ば目をつむりつつ中身を口に含んだ。舌が火傷しない程度に温められた薬湯はわずかな粘性を持って口の中に広がり、控えめな苦味とその奥に隠された甘味を運んできた。身体と相談するようにゆっくり飲み下すと、液体は食道を丁寧に舐めて身体の芯に小さな火をともし。そして今や穴だらけの胃に辿り着いて拡散、穴の一つ一つを優しく撫でてやわらかな膜で包んで行った。

二口、三口と飲む度に身体の火は大きくなって、胃から更に奥の様々な器官に向けて膜が広がる。温かなうねりが背骨を伝い、首筋に届くとサデイの意識は水面へ浮上する。視界のぶれがスローモーションで収まって行く。

勇気づけられるようにしてマグカップを空にする頃には、薬が見つからなかったあの朝まで身体が巻き戻されていた。

「どうですか？」

「もう一杯」

都合二杯半、サデイは薬湯を飲んだ。最初は影に潜んでいた甘味が今では表立って口の中を満たし、彼に食後の安堵を味わわせる。

「私、隠れて色々勉強したんです。だから多分効くと思います」

「もう効いてきてるみたい」

レーゼはマグカップに残った薬湯を飲み干し小さく頷いた。

「多分大丈夫。でも油断しないでください。あと、お父さんには内緒で」

「分かってる。でも君はすごいよ」

「父が父ですから」

サデイは笑って立ち上がった。槍斧を捧げ持つと先ほどまでの半分の重さに感じられる。好調が近づいている証拠だった。

通路の向うから一際大きな歓声が響いてくる。試合が終了した合図である。途中から注意を払っていなかったため勝敗は分からなかったが、その事への関心は既にサデイの頭から消えて

いた。

柄の中程を両手で持って、瞬発力で一回転させると風切る音が甲高く響く。楕円形の光が通路の真ん中に描かれる。レーゼがおだて混じりの驚声を上げた。サディはそのまま槍斧を脇に構えて闘技場へと向き直った。

「ありがとう。行ってくる」

「長引かせないように気をつけて」

「どのくらい持つの？」

「少しだけ」

「充分だね」

それだけ言って歩き出したサディに向かってレーゼは注意を促す言葉をかけたが、彼は片手を上げて返礼するだけだった。彼女は少しふくれてマグカップを鞆に放り込むと、彼とは反対方向へ戻って行く。

「気休めですからね」

サディは闘技場への道すがらアンガスとすれ違う。無然とした表情からして予定通り負けたのだろう。彼はサディの姿を認めるとそれを隠すようにわざとらしく心配そうな表情を作り上げ、何か二言三言投げかけてくる。だが、その声はもう彼の耳まで届かない。アンガスの顔を見ても何ら気持ちが動くことはなかった。

#### 四

とは言え、レーゼが最後に釘を刺した通り、確かに薬湯は気休めに過ぎなかった。それが証に、四方から降り注ぐ観客の声がどこかひずんで聞えてくる。視界は辛うじて落ち着きを保っているが、いつ焦点が合わなくなってもおかしくない状態と言いつつ換えても良い。胃の縮みように鑑みると、動けばせいぜい五分もつかどうかというところだ。

一方で、精神が刃のように磨き抜かれた光を放っているのをサディは感じていた。神経に作用する薬草が入っていたのだろうか。意識にかかっていたもやは今や完全にその姿を消し、想像力の手足は未来へ伸びて戦いの行方を無限に予測する。手足も、確認した訳ではないが感覚に遅れをとることは無さそうな軽さが戻っている。持久力を考えて全開で行くことはしない。それで充分な戦いになるはずだ。全開ではない戦い方というものをどこまで出来るか自信はなかったが。

気付くと闘技場の中心に着いていた。眼前には彼より二回りほど立派な体格をした男が立っている。衛士団長のエンキである。薄手の全身鎧に包まれた身体はまた筋肉の鎧で覆われ、腰に差した長剣も彼にかかればフォークと変わらぬ重さに見えてくる。一見して、前年よりも強くなっていると感じた。多くの研鑽を積んだのだろう。ハイトとの実力差を意識したのだろう

か。

それでも僕より強くはない。

サディは一瞬浮かんだ慢心をすぐさま脳から弾き出す。半病人状態の自分を思い出して集中を途切らさないよう槍斧の柄を握り込み、グリップを確認する。手の収まりはまずまずで、どうやら思い通りの軌跡を描いてくれそうだ。あとは見せられる程度の試合を作れるかどうかというところだが、敢えてそれについては考えないことにした。どうなるにせよ後に引く選択肢はないのだ。

「顔色が優れないようだが」

ちようど彼の額に話しかけて来るような調子だった。低く震えるようなその声は、額を通り抜けて直接彼の脳に届けられる。子供のいる声だ、とサディは何となしに考える。気遣わしげではあるが、それはサディよりもむしろ試合そのものへの心配といった口調である。

揺さぶりをかけられた頭でその言葉を反芻した。もしや、自分が勝っても良いと申し出てくるつもりなのだろうか。それだとしたらお門違いだし、少し力を見せつけてやる必要があるかもしれない。そうではなく単に試合の内容を考えての発言ならば聞き流しておくしかない。どうせ相手と息を合わせた上手な試合運びをする余裕はないのだから。

「色白なんです」

エンキは安心したようにきびすを返す。サディも自分の立ち位置に取って返す。その際に槍斧で足元を難いでやると、砂埃が巻き上がり応援の声に勢いをつける。特に、女性の甲高い嬌声は、試合開始前だというのに最高潮まで達していた。

再び闘技場の中央を振り返る。相手は既に兜の面頬を下ろし、臨戦態勢に入っていた。丁寧に刈り込まれた髻も安堵の思いを起動させる口元も、今や全てが鉄の板に包み隠されている。唯一窺えるのは、戦闘前に似合わない穏やかさをたたえた双眸。腕に簡素な盾を括り付けただけのサディとは対照的な重装備である。それを見て安心感がよぎった。とりあえず、間違つて殺してしまうことはない。もっとも相手からすればやり辛いことこの上ないかもしれないが、そこは相談済みである。

エンキの長剣が抜き放たれる。サディは槍斧を水平に構える。そして勝負開始の鐘が鳴った。

まずは挨拶といったところで、エンキが切っ先を胸の高さに突き出してきた。サディはそれに応じて斧刃を軽く合わせ、そのまま巻き込んで弾いてしまえばどんなに楽かと考える。本当の実戦であればためらわずに跳ね上げ首を切り落としているところだ。しかし、観客の視線に加え両都市の有力者も顔を揃えているこの闘技場において、それは不可能である。出かかったため息を飲み込んで刃を打ち鳴らし、後方へ一歩ステップする。

続いて繰り出される型通りの打ち込みを二つ三つ簡単に払って盾の出そうな所へ横薙ぎの返

礼を一つ。しかしエンキの反応は予想していたよりも緩慢だった。不意を突かれた形になって早くも体勢が崩れかかる。

ちよつと勘弁してくださいよ。

思わずこぼれかかる言葉を遮るように槍斧を反転させて長剣の根元に打ち込むと、エンキは何とか身体のバランスを取り戻し防御の態勢をとる。半身に構えて盾を前に押し出す形である。サディは半ば呆れながら盾の中心を突き、カウンターとばかりに返って来る斬撃を柄で受ける。するとその震動で胃が跳ね、吐き気が堰を切って押し上げられてくる。押さえ込むように唾を飲み込んで耐えようとするが、視界の歪みが大きくなって足元がふらついた。傍目にはエンキの一撃で体勢を崩した格好に見えなくもなく、観客は序盤から両者譲らぬ戦いと捉えて一層声を張り上げる。

槍斧をつつかえ棒にして踏みとどまると、ここぞとばかりの反撃がサディを襲う。

まずはステップを入れ替えて逆からの水平斬り。それも柄の途中で凌ぎ、次いで順手の袈裟斬りに下段からの切り上げを合わせて弾く。するとエンキの右腕はまるで教科書のような動きを見せ三段の型に入る。足払いから盾を突き出したタツクル、それをバックステップでかわした所に大上段からの打ち下ろし。サディは槍斧を斜めに構えて受け流す。一撃を受けるごとに視界の波がゆらめき、菜湯の効果など嘘のように内臓が暴れ回る。へたり込みそうになるのをこらえるのに精一杯で攻撃まで手が回らない。

どうしたと言わんばかりにエンキの攻勢は続く。しかし上中下と丁寧に分けられた斬撃は、力はあるものの一本調子過ぎてサディの身体に届かない。

最初は正直に柄で受けていたサディだが、五回十回と重ねられるに連れていささかうんざりし、やがて大儀そうな回避へと行動をシフトさせてゆく。それに苛立ちを感じたのか、エンキの攻撃は一撃一撃の重さを更に増して風切る音を辺りになびかせる。客は既に大喜びだが実情は逆の意味で一方的である。

サディは何度目かの袈裟斬りをかわしざま、観客席の上方を横目だろうか。貴賓席の端にハイトの苦虫を嘔み潰したような表情が見て取れた。

「ごめん」

苦笑いを嘔み殺してつぶやき、そして地面に達しようとしている長剣の刃を斧刃の返しで押さえつけてやる。一時の休息である。エンキはかすかに息を切らして彼を睨み、それから二、三步後ろに下がって攻撃の姿勢をとった。

三秒。

静止によりわずかながらも落ち着きを取り戻した身体を確認して、今度はサディが動く。エンキの型を真似た足払いからの三段攻撃。タツクルの代わりに切先での突きを交え、跳ね上げた盾に上段切りを打ち込む。衝撃でよるめいたところに止めを入れはせず、わざとゆっくり腰元に構え直すと慌てて差し出された長剣の刃を狙い撃つ。そうするとエンキの胴体は完全な無

防備になったが、サデイはここでも仰々しく構えを直して時間を稼ぐ。

再び貴賓席を見るとハイトが片手で顔を覆っている。下手な芝居だったらしい。

エンキの目は、今や面頬の奥で怒りに燃えている。それが未熟な自分への怒りかわざとらしい演技に対するものなのか、サデイの目には分からない。

エンキが感情に任せて大きく振りかぶる。すると、胴薙ぎの気配を察知したサデイの身体が一足先に動く。逆に相手の左手に回った盾目がけて斬撃を放ち、刃と盾が触れた部分を軸にして一気に後方へと回り込んだ。そして完全に空になった背中に向かって足の裏で蹴りを入れる。

まずい。

彼は瞬時に全てを後悔する。エンキの怒りを更にかき立ててしまい、ついでに体幹を崩したことで吐き気にも拍車がかかったのである。彼はそのまま片膝を付いて口元に手をやった。先ほど飲んだ薬湯と胃液がないまぜになって喉元までせり上がっている。無理矢理押し戻そうとすると涙で視界がぼやけて行く。

もう駄目だ。

そう思ったあとの展開をサデイはよく覚えていない。確かなのは、身体は最後まで着いてきたという事実だけである。

振り返ったエンキは最早感情を抑える努力など微塵も見せず、衛士団長の威厳をかなぐり捨て力任せに長剣を振り回してくる。刃が迫るとサデイの防衛本能が身体を無理矢理動かし防御行動を起こす。回避。打ち払い。受け流し。バックステップ。打ち払い。打ち払い。打ち払い。左右の切り返しに槍斧を回転させて応じ盾を蹴り飛ばし柄尻で脛を打ちそのまま顎をかち上げ得物を反転させ切先で突き飛ばす。そして敵が最終手段とも言える型を繰り出してきた所で視界が一気に開け、身体が跳ね上がった。

何度見たか知れない斜め上方からの剣戟を槍斧で受ければ、最早その後続く連撃からは抜け出せないコンビネーションである。それを知っていながらサデイは敢えて受け止める。エンキの目に勝利の確信が見えた瞬間、上半身を反転させて盾に横薙ぎの一撃を入れ外側へ弾き飛ばすと一気に懷まで飛び込み次の一撃が脇から飛んでくる寸前に敵の頭上へ飛び上がる。そして身体を空中に横たえた状態に置いてから全身のバネを使って槍斧を回転させ、肩口のやや奥を狙って渾身の一撃を打ち込んだ。

サデイの無意識的な狙いは斧刃の端を鎧の隙間に引っ掛けることで、それは見事に成功した。勢いのまま彼と彼の相棒はエンキの上半身を前方へ引き倒す。エンキは完全にバランスを崩して倒れ込み片手を地面に突く。一步遅れて着地したサデイは念のため頭に蹴りを入れてから斧刃を首元に添えた。エンキはうなだれ、敗北を認める。嬌声がサデイの五感を揺さぶって耳の奥から体内を駆け巡る。

三度ハイトを見上げると、仕方なしと言った表情で拍手を贈っていた。

何とかやり通したという安堵と急激な運動から来る最後の吐き気に耐えきれなかったからと言って、誰もサデイを責めることはできない。しかし、場所もタイミングもやり方も全てが悪だった。

エンキが兜を脱ぎ、さばさばとした表情で彼を見上げ手を差し出してくる。握手をするんだ。そう思っただけ空いた手を上げた瞬間、かつてない吐き気と共に胃の中身が全て逆流した。吐瀉物は手に遮られること無く空中に四散し、にこやかにかけたエンキの顔を覆った。悲鳴とため息の渦が闘技場を包んだ。

## 五

事件を境に、サデイの評価は衛士団だけでなく一般人の間でも急落した。曰く何故体調を整えておかなかったのか。どうして闘技場を去るまで我慢できなかったのか。人々は彼が限界まで耐え抜いた事実を見過ごし、ひたすら悪夢の瞬間のみを反芻した。

対抗戦の勝敗決議は揉めに揉めた。まず挙げられたのは、刃を首に突きつけた時点で勝負はついており、その後何が起ころうともサデイの勝利は揺るがないという意見である。一方で、サデイも限界を超えたのだから勝利と呼べるものではないと反論もあった。更にはあのまま勝負が続いていたらサデイは戦闘不能であるからしてエンキの逆転勝利と見なすべきと、極端なことを言う者も現れた。そして、両都市の衛士団幹部、市長、市議員、運営委員全員が一同に介し、侃々諤々の議論が行われた末、今後二度と同じような事件が起ころないようハイトが管理を強化するという約束のもと、ようやくサデイの勝利が認められたのである。

長い長い会議の間、サデイに対するいたわりや憐憫の情が表出することは一度もなかった。「とにかく奴は二度と出さな」

大勢の人間が実際に嘔吐する瞬間を見てしまったおかげで、町はしばらくその話題で持ちきりだった。風説には尾ひれが付き、彼がたまたまエンキの顔に嘔吐したという事実はいつの間にもやら狙いすました行動であるように語られ、あるいは相手都市への宣戦布告と言われ、サデイは悪意のヴェールを被せられ貶められた。

街角では子供達が喉に指を突っ込んで嘔吐く遊びが流行り始めた。父兄達はその根源をサデイに求めたため、彼は一時期アンチヒーローの象徴となった。それまで彼を慕っていた女性達も半数以上が厳然たる現実を見せつけられたことで心を離して行った。

影響を受けたのは周囲の人間だけではない。胃液と薬湯のカクテルを浴びせかけられたエンキもその後は散々なものだった。彼は対抗戦の翌日から、毒の滝に打たれて身体が腐れて行く夢を毎晩のように見る羽目になる。そのため夜中に飛び起きないで済む日は三ヶ月に渡って失われた。更には起きている間もうつむく度に天から何かが降ってくる妄想に蝕まれ、一種の神経症として一時期は団長職を離れざるを得なかった。しかし、ケガの功名と言うべきか。復帰

後はどんな劣勢の試合においても頭を垂れたり膝をつくことがなくなり、数年もすると不撓不屈の戦士として名を馳せて行く。それはまた別の話である。

一方、サディ本人はと言えば件の失態によって衛士団での地位が取り返しのつかないほど損なわれてしまった。出世の道は完璧に閉ざされたと言える。また、対抗戦から弾き出されたのはもちろん、団内の定期戦でも彼の相手になろうとする者は一人減り二人減り、終いには殆ど誰もいなくなった。日常の訓練ですら大多数の団員が彼との手合わせを躊躇した。食事時に進んで彼の隣に座ろうとする事は間違った勇氣の象徴と捉えられ、それ以外の場面でも団員達は彼に近づかなくなつて行つた。薬草を盗んだアングス一派ですら彼に手を出そうという姿勢は見せなくなり、やがて彼の存在を無いものとして扱うようになる。要するに、苛めが無視に変わった訳である。

僥倖もある。サディの症状が対抗戦を境に段々と改善されて行つたのである。これには見習い薬剤師レーゼの存在が大きく関わっていた。

彼女は研究という名目の元にサディの症状を仔細に調べ上げ、また自宅やら図書館の文献を漁つては新薬の調合に努めた。また、ことあるごとに彼の元を尋ね、時間が許す限り顔を合せて話し合つた。旅商人が町へ来るたび新たな薬草を仕入れもした。それまで誰も成し遂げられなかつた内臓疾患の薬物治療に心血を注いだのである。

その結果、即効性の薬湯と遅効性の煎じ薬を組み合わせることで、彼の状態は徐々にではあるものの改善の気配を見せ始める。そして、一旦兆候が現ればあとは全てに加速度がついた。

軸にする薬を選定し、織り交ぜる副次的な薬草の量を葉一枚単位で調整する。全ての処方羊皮紙にまとめ、最善の組み合わせを特定して行く。作業は気の長いものだったが、彼らの間に焦りはなかつた。

三年も経つた頃だろうか。サディの顔色は昔とは別人のように血色を取り戻していた。薬さえあれば健常者と同程度の生活が出来るようになったのだつた。身体は軽く、歩みの頼りなさは嘘のように消えていた。そして、それは同時に衛士団最強の力を手に入れたことをも意味した。

それでもハイトを除く大多数は彼を認めておらず、失態が帳消しにされることもなかつた。身体の復活に伴つて彼の内面にも何らかの変化があつたのは間違いない。それが証拠に、日常では大人しさを保つていたものの、訓練で出番が来れば彼の立場など考えず相手を打ち倒す場面が多々見られるようになった。また、人と対面する時に時折見せていた申し訳無さそうな態度も駆逐された。主張のなさを除けば、彼はいつぱしの衛士としての態度を身につけたのだと言える。

更に月日が流れ、ある日サディは久々に定期戦への出場を認められる。ハイトの尽力の成果だつた。

訝しげな視線が見守る中、彼はハイトの期待通り立て続けに十人の衛士を倒してみせた。全てが一撃必殺の鮮烈な戦いぶりだった。戦いを見守る団員は、倒される仲間が増えるごとに顔色を悪くし、終いには何かが張り付いたかのように表情をこわばらせていた。サディの氣勢は観戦者を圧倒し、一部からは控えめな賞賛の拍手さえ引き出した。一瞬に過ぎないかも知れないが、彼は本来あるべき地位についたと言つてよい。

だが、彼はその事に喜びを表したりはしなかった。代わりにふつとため息を一つ吐くと、次の相手を待たずにその場から立ち去つたのである。

団員達は体調不良と捉えたのだろう。みな大した疑問を浮かべることなく彼を見送つた。誰一人として引き止める者はいなかった。サディに固執し続けていたあのハイトですら。

翌朝、サディは少ない荷物と共に衛士団からいなくなった。否、正確には衛士団ではなく、町から姿を消したのだ。同じタイミングでレーゼも葉草やら調剤器具と共に行方不明になつており、町は一時騒然となつた。

ハイトは衛士団を動員して町とその周辺部をしらみつぶしに搜索した。また、市長に働きかけて隣接都市に触れ書きを出すなど、越権行為と言われる程にサディの足跡を追い求めた。

だが、そこまでも芳しい成果が現れることはなかった。サディとレーゼは誰にも何一つ語らぬまま町に別れを告げ、跡には塵すら残されていなかったからである。市民は二人が駆け落ちした、サディの後をレーゼが追つたと様々な噂を立てたが、どれも証明には至らないまま煙のように立ち上る先から消えた。

レーゼの父親だけはその気配も理由も気付いていたようだが、ハイトが事情聴取に訪れた時、彼は何も言わず首を振るだけだった。その態度から垣間見えた事実には、ハイトは天を仰いだ。彼を慕っていた団員も彼に惚れ続けていた数少ない女性達も、しばらくすると諦めに辿り着かざるを得なかった。

数ヶ月も経たず、彼らの事を話題に出す者はいなくなつた。

その後何度か対抗戦の伝説が持ち上げられることはあつたものの、二人の行方は依然として知れない。